

アイデアの 錬金術 出版と文化

ジョン・オークス

John Oakes
The Alchemy of Ideas:
Publishing and Culture

アイデアの錬金術…出版と文化

ジョン・オークス著

(オックスフォード・ハンドブック・オブ・パブリッシング・スタディーズに掲載予定。編集・マイケル・バスカー)

グーテンベルクの時代から、いやきつともつと古くから、本の発行人たちは人々から最も注目される、つまりお金になる物にその存在を頼ってきた。波乱万丈、しかし半分作り事のような紀行書や淫らな書物、パズル本、資金援助を受けている金持ちを持ち上げた伝記まで、出版は常に商業としての側面があった。そのため「出版と文化」というタイトルは相互に矛盾する言葉が並んでいるようにも取れる。しかし、文化という言葉は社会という組織体の限界という意味まで広く考えるなら、書籍の出版はその境界線を決定する重要な役割を果たしてきたといえるだろう。出版は文化の変遷、交流、解釈そのものだから。出版は商業的な成功と文化的本質の保持という、相反するふたつの要素にまたがるため、単なる儲け商売ではない。出版は思考を、編んだ文字という形で

伝達する。創作者／著者から消費者／読者への直接のメッセージだ。この流れはデール・カーネギーの著作だろうがサミュエル・ベケットの著作だろうが変わらない。この思考の伝達、伝える作業が「執筆」と「出版」との大きな違いだろう。「執筆」は身体的な作業だが「出版」は個人の枠を外れ、読者を含む複雑な世界に入り込む。出版は、読者や読者コミュニティの存在を望み、文化的に影響を及ぼすことを願う。

アイデアを頁に移す行為は、書き手から文章の受け手への関与意志の表れであり、その関与方法は他のいかなる媒体でも見られないものだ。読み手は書き手が記したそのまゝを、意図された順序で読み進めることになる。ダンス、舞台、音楽、絵画とどの分野をとっても作り手から受け手への伝達の過程で失うものがある。この点で、書くことほど明確で正確な意志の伝達媒体は他にないだろう。〔脚注①〕本が無いところに文化は無いと言うのは大袈裟だろうが（口頭伝承は昔も今も社会に広く存在する）、本は文化的メッセージを作り出し、保存し、継続させていくための強力な道具であり、効果的で簡単な伝達方法だ。（ここでいう「本」とは、文字で著された一定の長さを持った、あらかじめ決まったメッセージを伝える媒体を指す。この定義には印刷本、電子書籍、オーディオ・ブックも含まれる）。

書物が現れる以前に文化（つまり自己独自性の表現）がどうおこなわれていたかを考えてみると、そこには長い時間をかけた個人と個人の関係を基にした実践と発展があったと思われる。会話や討論は生活文化には不可欠だろう。書籍出現以前、情報は人から人へと時間をかけて伝わった。小さな集団を通して口承あるいは写本などで、長い距離を渡っていった。大きな論争もゆっくりとなされ、それは数十年、ときには新たな世代を巻き込む形のものであった。これらの交流は共通体験となり時間をかけて社会を変えていく。作家デヴィッド・フォスター・ウォレスは『Consider the Lobster and Other Essays（ロブスター考察とそのほかのエッセイ）』で「社会基準を設定する目的は、自分たちが集団として決定した本当の興味と目的に沿って、自分たちの行動（発言も含まれる）を評価するためだ」と言っている。これが文化の確立につながる。

これからお話しすることは、何世紀にも渡って頑な戦いを続けた発行人やその支持者、また擁護者、それと同じくらいに強固な手段を用いた敵対者から生み出された関係を記したものが、もちろん完全なものではなく個人的な概説になることはお許しいただきたい。歴史的な敵対者としては異端審理の宗教裁判所、王制、ナチス・ドイツ時代の帝国文化院、ニューヨーク悪徳弾圧協会などが挙げられる。

〔脚注①〕
だが簡単にそうだと結論づけられない。プラトンの「パイドロス」でソクラテスは、神々の書士であり、書士の神でもあり、そのほか様々な能力を有する朱鷺の頭を持つエジプトの月神トートに出会ったファラオの伝説に關し語っている。トートの教えは人々に知らされるべきだと告げ、様々な奇跡が語られたあと、最後にトートは彼の最大の贈

り物をファラオに授けた。それは「記憶と英知の靈薬」と言えるべきものだった。その贈り物とは、当然のことく、書くということだ。ファラオは異議を唱えた。誤りか敵意か分からないが、トートは「それらが本当に持つている物の反対の力」(Σεπτε, Η. Ν. ファウラー訳、ハーバード大学出版局)という言葉を使った。言葉は思考や出来事を完全正確に描写することはできず、おおよそを伝えるだけに過ぎない。ゼノンのパラドックスを唱えたことで有名なエレアのゼノン（活躍期：西暦紀元前五世紀）までは、ギリシャの哲学者たちは自らの議論を詩を通して語っていた。全てのことを考え合わせれば、これが複雑なアイデアの伝達方法としては最も有効なものかもしれない。

印刷機と一五世紀中頃のヨーロッパで誕生した活版印刷技術により、文化の変わる速度が上がった。それにつれ「孤高な写字生（写本、写字をする職業人）」は時代遅れのものとなっていった。印刷は書き物の影響力を何十倍にもして、大陸じゅうで時を同じくして文化的な議論を可能とさせた。バベルの塔の神話のように、あるひとつの声が大きくなる状況に、権力側は懸念を示した。書き物にはあらかじめ決められたプロパガンダとしての役割があったため、それまでにない知的動揺を生じさせた。

これがモダンパブリッシングの誕生といえるだろう。その後、技術の変化はあったが出版ビジネスの原則を根底から変える事象は生まれてこなかった。職業としては約五〇〇年間変わらずにいた。印刷と活版誕生にまつわる事件や人々を見渡すと、二一世紀の出版に関わる人は、今も昔も同じようなことが起こっていると思うはずだ。大量生産を可能とする活版印刷技術を編み出したとされるマインツ出身のヨハネス・グーテンベルグは債権者に事業を奪われている。ベネツィア人アルドゥス・マヌティウスは自分のアルド印刷所から出版した本の海賊版と戦った。巡回宣教師だったオランダ人デジデリウス・エラスムスの生涯を見ると、司祭で発行人だった彼は奨学金が必要で、仕

事をするために常に資金を出してくれるパトロンを探していた。不安定な資金、著作権侵害、先駆的しかし経済的にリスクがある本を絶え間なく出版していく必要性、これらは今日の発行人にとっても身近な課題のはずだ。

技術革新で可能となった、本作りの手軽さや一冊あたりのコストダウンは印刷業者／発行人を豊かにするばかりでなくほかへも影響を与えた。それは「読み物の少なさ」を解消したと、一六世紀セヴィリアを代表する印刷業者ジェイコブ・クロムベルガーは喜びを語った。^⑧クロムベルガーのような存在は、新たに掘り起こされた本への需要の興奮や混乱が生み出した必然的な文化的融合の産物だといえる。本は持ち運びができる、安価なエンターテインメント、知識、プロパガンダの供給源だった。スペインで働くクロムベルガーはドイツのニュルンベルグの出身だった。彼は改宗したユダヤ教徒あるいはマラーノ（宗教裁判を恐れ密かに自分の宗教を實踐するユダヤ教徒）だったようだ。多分、メキシコ最初の主教であるファン・デ・スマラガの依頼により、クロムベルガーは一五三九年に彼の代理人としてイタリア人ジョバンニ・パオリ（ファン・パブロスという名前でも知られている）を送り出し、メキシコ市に新大陸で最初の印刷所を設立させた（家は今もそのままモネダ通りとリセンシアド・プリモ・ヴェルダッド通りの角に建っている）。^⑨その六年後、クロムベルガーの建物からアメリカ大陸初の印刷に

⑧リサ・ジャーディンがこう言い換えている。「Worldly Goods: A New History of the Renaissance」P.141

⑨「The Library at Night」のなかでアルバート・メンゲヘルは積極的に異教の禁書をおこなったスマラガが「一方で本を作り、片方でそれらを破壊する」というパラドックスを理解していなかったのではないかと語っている。私は、彼の理解は的確だったと唱える。彼は本の持つ神聖な力を知っていて、本に力を注いだ。新たな世界を作り出すためには、古い世界を破壊しなくてはならない。

よる書物が発行された。その本はスペイン語とナワトル語で作られた（書名は『Breve y más compendiosa doctrina Christiana en lengua Mexicana y Castellana』。著者はほかでもないスマラガだった）。スマラガはメキシコの異端審理の宗教裁判所を率い、通説では最初の公共図書館を作り、出版の価値を理解していたという。^{〔脚注④〕}彼は先住民文化を攻撃し続けたことでも知られている。スマラガは、積極的にアステカ族古代写本狩りをする一方で、その攻撃をおこなった。一五三〇年、彼はメキシコの町テスココでその古代写本を焼いた。本の破壊は、古い文化を焼き払い新しい文化を課するための剣の力をさらに強めるものだった。

黎明期の印刷史の中で、自己を「啓典の民」としたユダヤ人すなわち、モーゼに二頁の「本」、つまり「十戒」のふたつの石版を届けたことを核とする宗教を形成する彼らほど書籍文化に関わった集団はいなかっただろう。ユダヤ教寺院での礼拝の中心には文書がある。それは通常、聖櫃^{せいぐわ}と呼ばれる箱に保管されているトーラーの巻物、あるいは旧約聖書である。トーラー以外にも、ユダヤ教文化の持続と安定に重要とされる数冊の本があり、ユダヤ教は出版業発生の時から十分な市場があったといえる。ユダヤ教の教義に深く刻まれた議論と分析の伝統はタルムードによく示されている。タルムードはユダヤ教律法と伝承の議論を収めた文章群で、古いものは二〇〇〇年を超える。文化集団

としてのユダヤ人の行動を変え、地域を越えた統一を助けたものは印刷物としての祈禱書の標準化だった。インドのコーチン、ワルシャワ、アムステルダムに住むユダヤ人も同じテキストの本を読み同じ歌詞の歌を唄うことができるようになった。全ての祈禱所に印刷本が備えられるのは時間ばかりでなかった。ベネツィアにはルネサンス期に最も活気に満ちたユダヤ人コミュニティがあったが、ここではユダヤ人は本の出版を禁じられていた。しかし、祈禱書の需要がだんだんと増していき、印刷業者／発行人にとつて利益の出る商品となり、ベネツィアは一五〇年間、印刷の市場として栄えることになった。

出版は様々な協力関係なしには実現されず、共通利益のため、違った文化がそれまでにないほど結集した。キリスト教徒、ユダヤ教徒、マラーノが共に仕事をおこなった。出版という行為が、商品を配布するだけではなく、文化交流に役立った（それは現在も役立っている）。一四八三年に生まれたドイツの神学者・作家マルティン・ルターは、人文主義（エラスムスはその強力な賛成者だった）とユダヤ教だけではなくアラブの思想を嫌った（そのため、触媒のような作用を持つアラブの科学と哲学を基にもたらされた進歩も嫌った）。しかし、マルティン・ルターが嫌った人文主義、ユダヤ教、アラブ思想は本という形で、ルネサンス期の見識ある貴族たちに伝わった。彼らはユダヤ教や

〔脚注④〕
フェルナンド・バエズ 訳
フレッド・マックグダム
[A Universal History of the
Destruction of Books: From
Ancient Sumner to Modern
Iraq] p.131

アラブの書き物の熱心な収集家だったのだ。

本を念頭に置いた検閲の考え方は権力者たちのなかに早い時期に生まれた。もし本が文化や「間違った」考えを広げるなら、そんな本が無ければ思想の汚染は理論的に排除できる。出版が許された本にしても、悪い者の手によれば間違った使い方をされる。一五四六年、プロテスタント主義者たちからの脅威と、この新技術を使っている、権威からの影響を受けない者たちの数の増加により、カトリック教会はトリエント公会議第二セッションIVで「何も束縛のない印刷業者たちは、自分たちの好みによりなんでもできると思い、教会幹部からの許可なしに、神聖な聖書といわれる本、紙幣、人々に対する噂話などを平気で印刷している」と非難した。そして、その後こう公布された…

…著者の名前なしに、本や神聖な印刷物を印刷または印刷させることは法にかなっていない。また、事前に司祭の検閲を受け承認されたものでなければ、今後販売はもちろん所持することは許されない。ラテラン公会議で決定された教法により破門あるいは罰金が課せられることになる……検閲ならびに承認なしにそれらの書き物を貸し、あるいは配布した者は、印刷した者と同様の刑に処する。また、それらを所持していた者、読んだ者は、彼らが著者を見つけ出さない限り、彼らが著者とみなされる。

また、公会議の「非難されるべきは、非難されなければならない」という言葉は権力側に彼らの不満を行動に移すきっかけを与えた。権力側の行動は、本を体制転覆を引き起こす媒体とみなした大量破棄だった。一五五九年、同様に深い根柢を持たないほかの複数の公布を受けローマ教皇ピウス四世は『Index Librorum Prohibitum（禁書目録）』第一版を出版した。この目録にはフランス、スペイン王国神聖ローマ帝国、新大陸などの地方文献も多く含まれ、新たな驚くべき法令制定のきっかけともなった。一五六五年、メキシコ第二地方協議会はウルガタ聖書（教会の許可を得た四世紀のラテン語訳聖書）を含む聖書の配布制限をし、ヨーロッパ人以外の所持を禁じた。禁書目録はその後も数々の版を重ね続け、一九六六年まで教会の教理とされた。目録には四〇〇〇タイトルが含まれ、マルティン・ルター、ジャン・カルヴァンのみならずヴォルテール、ルネ・デカルト、シモーヌ・ド・ポヴォワールの著作なども含まれていた。

海を越えて、一五三四年にはイングランドで国王至上法が制定された。この法ではイングランド王ヘンリー八世をイングランド国教会の唯一最高の首長とした。また、この年、ヘンリー八世はケンブリッジ大学出版局の設立にも関わった。出版局の設立は勢力争いをする者たちの声を抑える有効な手段だった。ヘンリー八世からエドワード六世の

統治になっても政府は「バピスト（カトリック教徒の軽蔑的名称）」の本に容赦ない攻撃を続けた。スコットランド出身のスコラ学者・神学者トマス・アクィナス、ドゥン・スコトゥスなどの本は見つげだされる度に破棄された。一五四八年ヘンリー八世は、三〇〇年間ケルト語研究の中心であったグラスニー・カレッジを破壊した。建物と共にケルト語の貴重な蔵書も失われた。その後、メアリー一世の統治によりカトリック教は復活したが、弾圧はほかの方向に向けられた。一五五七年、一五〇年前に設立された書籍出版業組合は王の勅許状を受け、出版をおこなえる者はふたつの大学、二一の既存の印刷業者だけに限られた。書籍出版業組合は公認検閲官として、自分たちの規則に違反する本、著者、印刷業者に対し罰を課す権利と義務を持つことになった。この結果、権力の代理人としての役割を果たした。

出版と本は一七世紀半ばの清教徒とイングランド王党派の内戦に巻き込まれていった。その戦いは、実際の戦場より少しばかり血生臭くないという程度だった。その例として挙げられるのがイングランドのウィリアム・プリンの己を曲げない人生だろう。清教徒の彼は批評家であり発行人でもあった。彼は、著書『Historiastix: The Player's Scourge, or Actor's Tragedy』（ヒストリオアマスティックス・プレイヤーの災難あるいは俳優の悲劇）でヘンリエッタ・マリア王妃を含む「不道德」な俳優たちを攻撃した。

印刷された全ての本は焼かれ、プリンは耳を切り落とされた。しかし、プリンが懲りずに出版を続けると、切り落とされた耳の残り部分も削がれ、焼印をおされ、生涯幽閉の罪を受けた（驚くことに、プリンは後に王政復古の支持者となっている）。

しっかりとした主張がなされた書籍が社会におよぼす影響について、支配階級が恐れと強い関心を抱くのは当然だろう。イングランドでのユダヤ人追放が三〇〇年以上続いた後、ユダヤ人は、ユダヤ教宗教指導者レオン・オブ・モデナの二六三七年の著作『Historia de' riu hebraici』（ユダヤ教儀式の歴史）によって「人間性の復活」を果たした。ユダヤ人からみた異邦人、つまりキリスト教徒に向けたこの本はイングランドのオリバー・クロムウェル政府のもとでのユダヤ人復帰の道を作った。^⑤ 一方、大陸ではフランス人の識字率が五〇%に達し大きな変革が起ころうとしていた。それと同時に起こった君主側からの出版業を支配しようとした動きは失敗に終わっている。例えば、ギヨーム・デ・ブレはバスカルの『Les Provinciales』（プロヴァンシャル）を出版して刑務所に入れたが、その利益により金持ちとなった。^⑥

啓蒙主義がヨーロッパやアメリカに浸透していき、発行人の文化的な活動の焦点は宗教的なものから、政治的・社会的なものに移っていった。そのため、優れた出版には論

⑤ ^⑤ アレクサンドロ・マルツォー
ペーニャ

[Bound in Venice: The First
Talmud]

[http://primodivencianet.org/
printed-matter/bound-in-
venice-the-first-talmud/#_](http://primodivencianet.org/printed-matter/bound-in-venice-the-first-talmud/#_edn11)
edn11

⑥ ^⑥

[The Book: A Global
History] p.336. シェンカン
ド・ナルド 「The History of
the Book in France」

争はつきものとなった。トマス・ペインの本はベストセラーだったが、彼の著作は印刷業者、発行人、書籍販売業者（通常、ひとりですべての役割をこなしていた）が「配布により扇動的誹毀または冒瀆的名誉毀損として訴えられる危険が最も高い」^{〔補注②〕}ものだった。（革命論を唱えるトマス・ペインがいつまでも貧しいのは、彼の著作『コモン・センス』の多額の著作権料が大陸軍隊のミトン購入に充てられるからだと言われた）。聖書ではない限り、読むという行為には疑いの眼差しが向けられた。一八世紀の道徳保護者たちは「野放しのフィクション読書が道徳の緩みを生じさせる」^{〔補注③〕}と警告していた。

「冒瀆的な出版」とは、通常、政治的に急進な出版と同義語にはならない。ジャコモ・カサノヴァ、ヘンリー・フィールディングそしてマルキ・ド・サドの著作は、ジャン・ジャック・ルソー、バルーフ・デ・スピノザそしてジョン・スチュアート・ミルの本と同じくらいスキャンダラスで禁じられた作品であり、体制に対する攻撃性では引けを取らない。本の危険性は考えの伝達だけではなく、同じ興味を持つ者同士がお互いを知り得る点にある。「一七八〇年代、イングランド・ドーセット州にある街ウエイマスは流行のお洒落な町だった。ジェームズ・ラブという書籍商は……自分の本屋を『The Pantheon of Taste (嗜好の神殿)』と名付け、一般に開放された娯楽施設とした。施設

は朝六時から夜一〇時まで営業し、本他にビリヤード部屋、貸出ミュージカル図書館、展示ルームがあった……」。^{〔補注④〕}本は今も昔も哲学者アルヴァ・ノエの言う思考の「延長物体」であり、読者で作られたコミュニティの議論の焦点となり、私的文化の伝達道具だった。セルバンテス以降、著述行為の中心は本だった。ドン・キホーテを狂気に向かわせたのは本だった。また、フランソワ・ラブレ、ウィリアム・S・バロウズ、H・P・ラヴクラフトなど全くその手法は異なるが、彼らのような優れた作家たちの本はそれ自体でうっとりさせられる物として賞賛されるようになった。

複雑になった経済状況により、ベンジャミン・フランクリンのようにひとりで作家、印刷業者、発行人を担う人間は少なくなった。一九世紀を通して印刷業者（商人）、発行人（融合者）、作家（創作力の持ち主）の各役割は専門化が進んだ。その区別がはっきりするにつれ、見かけ上はそれぞれの専門性が高まったことになる。

人々の読み書きの能力が高まると体制側からの圧力が高まり、イデオロギー（社会、経済、政治思想や施策の基礎となる強固な価値や信念の体系）は社会の中でその影

〔補注②〕
「The Book: A Global History」p174「オリガニス・レイトマン」[Censorship]

〔補注③〕
アビゲール・ウーリアムス
「The Social Life of Books: Reading Together in the Eighteenth-Century Home」
p.3

〔補注④〕
同書 p.111

響力を持続することが難しくなる。技術の発展は世界中で新たな出版形態にある種の方
向付けをしようという権力側からの絶え間ない圧力と共にあった。時には、その力は新
たな出版形態を抹殺した。悪名高いアンソニー・コムストックの話がひとつの典型と
言っているだろう。彼は一八七三年に設立されたニューヨーク悪徳弾圧協会（フェルナ
ンド・バエズは彼のことをいたってふさわしく「現代の異端審問官」と呼んだ）の創立
者だった。この男は今でも全米で最も多くの本を抹殺した記録を持つ人物だ。^{〔脚注⑩〕} 体
制側のアングロサクソン系アメリカ人たちは最初オスカー・ワイルド、後にバーナード・
ショーやジェイムズ・ジョイスなどの作家たちの社会に及ぼす影響を食い止めようと必
死になった。この種の反応の悲しいことは、二〇世紀になってもその残忍な反撃行為の
残響が感じられたことだろう。アメリカの発行人や書籍販売業者は、単にある種の本を
出版するあるいは売ることですら刑務所に送られる危険に晒された。ウィリアム・プリン
グ・プレなどの先例の霊を呼び覚ますような、モリス・ジロディアス、ジョン・カル
ダー、バーニー・ロセットなど勇敢で頑固な発行人は、権力に反発し罰金や刑務所に行
く危険性に直面しながらも、権力側との戦いの相棒ともいえるウラジーミル・ナボコフ、
ヘンリー・ミラー、D・H・ローレンスなどの作家の作品を出版し続けた。ニューヨー
クの書籍販売業者でありフランスの前衛芸術家アルフレッド・ジャリの翻訳者でもあっ
たサム・ロスも、この種の職業に就いた多くの人々のように何度も刑務所に送られたひ

とりにすぎない。出版業界を動かす立役者たちはこうした脅威に対してあまり為す術を
持っていないようにみえたが、彼らの出版行為は教会や政府が決める規則を少しずつ崩し
てきた。文化的慣習は間違はなく変化しつつあり「余暇のエロティック化の勢いはどん
な警告の声でも止められなかった」。^{〔脚注⑪〕} インクを樽買いする男に喧嘩を吹っかける
などという二〇世紀の格言は核心部分で真実だ。その職業が誕生したその瞬間から、発行
人は訴えられ、刑務所に送られ、破産し、彼らの商品は非難され、禁止され、焼かれた。
しかし、彼らは耐え抜き、彼らが増殖させた物も生き延びた。一度紙（あるいは電子ス
クリーン）に宿され移されると、アイデアは権力と不屈に戦う驚くべき力を有するもの
である。

ルネサンス期の画家、金細工師、音楽家ベンヴェヌート・チェッリーニの自伝（一五六三
年）は、素晴らしく、長い古典作品で厚顔無恥な自己宣伝であるが、この頃から芸術家
は文芸創作が生み出す美的領域を理解していた。それが商業目的であっても、社会的な
影響が目的だったとしても、あるいは「単に」それまでとは違った媒体を使つての美的
探求行為であっても、芸術家と作家の活動は出版社設立のきっかけとなった。一九世紀

〔脚注⑩〕
フェルナンド・バエズ（訳アル
フレッド・マックアダーム）
『A Universal History of the
Destruction of Books: From
Ancient Sumner to Modern
Trade』 p.224

〔脚注⑪〕
ジェイ・ズヘルマン
『Bookleggers and
Smuthounds: The Trade in
Erotica 1920-1940』 p.106

のイギリスの詩人、デザイナーのウィリアム・モリスのケルムスコット・プレス（一八九一年）はイギリスのアーツ・アンド・クラフト運動（美術工芸運動）や社会主義価値の推進にとって重要だった。ヨーロッパ大陸では、象徴派たちが文芸誌メルキュール・ド・フランスを有していた。この文芸誌はギヨーム・アポリネール、アンドレ・ジイドなどの作品を掲載した。その数十年後の一九一七年、ヴァージニア・ウルフとレオナルド・ウルフはホガース・プレスを設立し、イギリスの芸術家や学者からなる組織ブルームズベリー・グループのメンバーの作品を掲載した。時を同じくして、ロシアでは「リテラリー・カンパニー・オブ・フューチャリスト」が発展し、ミラノでは「未来派宣言」「ファシスト宣言」（それぞれ一九〇九年、一九一九年）を著した芸術家フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティによって作られたEdizioni Futuriste di Poesia（未来派詩歌エディション）があった。この流れは継続され、二〇一〇年、芸術家ポール・チャンは彼のニューヨークを拠点とする騒がしい出版社バッドランズ・アンリミテッドから、好色本、マルセル・デュシャンのインタビュ、イラクの元独裁者サダム・フセインのデモクラシーについての演説などを出版した。出版により審美的な変化をもたらすことは、文芸分野で自分だけの領域を築くことになる。

「文明」に対してある意味で自由な考えを持つ発行人のもたらす脅威は、社会的なものや政治的なもののふたつがある。二〇世紀初頭のアナキストであるエマ・ゴールドマンは「自由恋愛」の早くからの提唱者だった。検閲と戦いつつ続けた発行人は十分承知だと思いが、肉体の快楽を謳った文書は時としてよい売り上げを見せるものの社会の安定を脅かす。例えば、バーニー・ロセットはヘンリー・ミラーの『北回帰線』を出版したことにより、何度かアメリカ政府に訴えられた。彼はまた、チェ・ゲバラの日記、フランツ・ファノンの『地に呪われた者』をはじめ数々のラジカルな作品をアメリカで出版した。熾烈な法的戦いは数十年に渡り、英語圏で百万部を売り上げた風刺小説『キャンディ』で最高潮に達した。この小説はテリー・サザーンとメイソン・ホフエンバーグが面白半分で発行人モリス・ジロディアスのフランスにあるオリンピア・プレスに書いたものだった。^{〔脚注⑩〕} アングラでの成功（一九五八年）から商業的大成功（一九六五年）までに至る過程には、『チャタレイ夫人の恋人』『吠える』『ブルックリン最終出口』などの作品群の正反対にあった「公序良俗の規則」の緩和があり、これらの作品出版後の急速な社会変化がアメリカにあったといえる。これらの作品の出版の抑制には、女優・歌手ドリス・デイに代表される明朗快活で完全な物への幻想を汚さないアメリカ社会の力が存在した。^{〔脚注⑪〕} 『キャンディ』のちアメリカとイギリスの政府は発行人と小

〔脚注⑩〕 モーリス・ジロディアスは度重なる法的争いにより破産を遂げて発行人としての活動を終えた。ジロディアスはウラジーミル・ナボコフの『コリータ』とJ・P・ドンドリバーの『The Ginger Man』（赤毛の男）の最初の発行人だが、著者たちから搾取するなか、悪名高い「エロチカ」の出版に傾倒した。権力側を最も激怒させたのは彼の政治的活動だった。一九四七年、彼は『Le pain de la corruption』（腐敗のパン）の出版によりフランスの文化・通信省（文化・通信相は作家アンドレ・マルロー）から訴えを起された。この本は当時の経済状況を批判したものであった。一九五九年、彼は同僚で同じく独自路線をいくバーニー・ロセットに手紙を書いた。「この状況は全く酷いものだ。私は、最も馬鹿げた

競り合いを繰り返したが、すでに戦いの勝負はついているのも分かっていった。

出版の力に対する憎悪と恐怖については一九三〇年代のドイツを抜きにしては語れないだろう。一九八一年にゲイリー・スタークが『Entrepreneurs of Ideology』（イデオロギーの請負人たち）^①で見せてくれたように、一連のドイツの発行人や出版社が数年の期間をかけて国内に極右翼が台頭する思想的下地を作り出した。基礎となる「強固」な哲学を提供したことで、国家社会主義台頭の道具となったとも言える。一九世紀末から二〇世紀初めにかけて、オイゲン・ディーデリヒス、ユリウス・リーマンなどの発行人は、多分、世界でも最も大きな文学市場からの利益機会を逃さなかった。彼らはマルクス主義者や移民に対する恐怖を煽り、ナシヨナリズムをかき立てた。彼らの本は間違いなくよく売れた。一九三三年にヒトラーがワイマール共和国の総督になった後、「危険」な書物を制限する法が制定された。文献学の博士号を持っている、小説家でありプロバガンダの天才ヨーゼフ・ゲツベルスは自ら焚書を始めた。書物は抹殺され、図書館は荒らされ、出版社や発行人の倉庫は「清め」られた。「フランクフルトでは本がトラックで運ばれ、学生が人の輪を作り、その中で本を焼いた」^②。ドイツの同盟国であった大日本帝国は、制圧のために中国で同様の組織的な図書館の破壊活動をおこなった。本を糾弾する側と作り手や擁護側との争いが熾烈になればなるほど、それが人

間自体を弾圧する前奏曲に過ぎないことがはつきりとしてくる。本への配慮、よい出版環境は社会のなかの人間性の評価と密接に繋がっている。「本を焼く者は、やがて人も焼くようになる」^③。相手側が神聖とする本や書庫を焼くあるいは処分する行為は、最終行為一步手前の侮辱だと、少なくとも書物破壊者は思っている。世界貿易センタービル破壊の翌年、アメリカ人牧師テリー・ジョンズはコーランを燃やし有名となった。また、一九五〇年の中国のチベット侵攻以後、民族の文化破壊（死者約二〇万人）は大規模な寺院ネットワークへの積極的な破壊と共に進んだ。寺院はチベット仏教の発行人の役割も兼ねていた。「…徳格（テルゲ）県にある寺院には五〇万を超える版木が眠っていた。これらの版木は一〇を超える広間に決められた形で置かれてある……これらの版木は需要に応じて印刷に使われる」^④。数千を超える寺院、その図書館、書物、版木を破壊しただけではなく、中国は「チベット人に経典を燃やさせ、あるいは破らせ、排泄物と混ぜあるいは地べたに蒔きその上を歩かせた」^⑤。破壊活動は徹底的で、一九九〇年代には多くのチベット人が図書館とはなんであるか知らないまてとなった。

①脚注⑥

ロシアは発行人や作家の作品の社会的地位の高さで知られている。そのため、ロシア政府はその過程を管理下に置こうとした長い歴史を持つ。その手法は事業を厳しく規制

理由で週に一度、あるいはそれに近い頻度で罰を受けている。フランスで本を出版し続けるのは難しい。今、海外の支局を、多分複数箇所の支局を立ち上げようとしている」。(ハーニー・ロセット [Russell] p.20) 一九七〇年にオリンピア・プレスが破産した際、彼はニューヨークに移ってきた。そのわずか四年後、ホルノファンタジー作品の『President Kissinger』により、米国内務省から国営企業のように伝えられた。ちなみに彼のビザの期限が切れたのかもしれない。(ナイル・サザーン [The Candy Men: The Relucting Life and Times of Notorious Novel Candy] p.284)

②脚注⑥

ナイル・サザーン [The Candy Men: The Relucting Life and Times of Notorious Novel Candy] p.13

③脚注⑥

フェルナンド・バエズ 訳アルフレッド・マックマタム [A Universal History of the Destruction of Books: From Ancient Sumner to Modern Iraq] p.210

④脚注⑥

「Das war ein Vorspiel nur. Dort wo man Bücher verbrennt man auch an Ende Menschen」ーハイムン リコ・ンペド [Ahmsor]

⑤脚注⑥

レスニッカ・ナス [Libericide: The Regime-Sponsored Destruction of Books and Libraries in the Twentieth Century] p.205

⑥脚注⑥

同書 P.213

⑦脚注⑥

同書 P.225

することや、国家の脅威になるとして作家や出版人を投獄するというものだった。初代ツァーリ（君主の称号）イヴァン雷帝はモンゴル民族との戦と大規模な拷問（それとノヴゴロド虐殺）で知られている。彼はまた一五五三年にロシアで最初の出版社モスクワ・プリント・ヤードを設立したことも知られている。数世紀に渡ってロシアの支配者は出版と大衆への影響との繋がりを理解していた。特に邪悪な結果を招き、一方で世界的な大ベストセラーとなった文書『シオン賢者の議定書』はロマノフ秘密警察のバリ支部部長であったビョートル・ラチコフスキーの指示で一九〇三年に改竄されたものだった。その三〇年後、ソ連は出版までの過程に幾重もの厳しい規則を課した。「最初は作家組合、それから国家が任命した各コミッサール、最後にソビエト連邦共産党中央委員会」からの規則があった。^{〔脚注⑧〕} スターリン自身、飽くことのない読書家として有名で、作家と彼らの作品に高い評価の念を抱いていた。そのため、彼らや発行人たちを投獄し処刑することに何ら躊躇がなかった。究極の編集者であり発行人であるスターリンにとって「編集の力は権力そのものだった」。^{〔脚注⑨〕} 第二次世界大戦後はソビエト連邦の国家出版委員会、別名ゴスコミズダートがその枠作りを担った。私的出版社（政府系ではない出版社）は、一九八〇年代まで事業が許されなかった。その規制が緩んだ後も、インフラの欠如、紙流通の厳しい管理で、私的出版社が出版活動をおこなうのは難しかった。一九八九年以後、文学やラジカルな作品の出版が急増した。しかし、驚くことではないが（常に楽

観的な出版社には例外的に意外だったかもしれない）、西側がそうだったように商業出版（ロマンス本、ハウツー本、お金目的の粗雑本）が市場を支配した。そして再び、発行人は本を敵視する人々の標的となった。その例として二〇〇六年、Thought Pressの発行人アレックス・カーヴェイのモスクワ事務所は爆弾による襲撃を受けた（一九六八年にはバーニー・ロセットのグループ・プレス事務所が襲撃され、二〇〇八年にはギブソン・スクエアの発行人マーティン・リンニャのロンドンの家が襲撃を受けた）。

「人は死ぬが本は絶対に死なない」。第三二代米大統領フランクリン・デラノ・ルーズベルト（FDR）の一九四二年の言葉だ。^{〔脚注⑩〕} ナチスの書籍と「退廃的」な芸術に対する弾圧は対抗宣伝に使えると感じたルーズベルトは戦時図書評議会（Council on Books in Wartime：CBW）を設立した。CBWは発行人W・W・ノートンを首長とする発行人や出版社の協議会だった。CBWのスローガンは「本は思想戦争の武器だ」というものだった。ルーズベルト政権下の一連の本を中心としたアメリカでの優れた文化プログラムは大恐慌時と第二次世界大戦時に頂点に達した。CBWは戦時に自分たちの出版プログラムを設け、最終的に一億二二〇〇万冊のペーパーバック本を海外にいる兵士たちに配布した。それらの本の著者にはゼイン・グレイからF・スコット・フィッツジェラルドまでが含まれていた。本は、時に酷い著作権侵害行為（社会主義者作家イニャ

〔脚注⑧〕
アイサイア・バーリン The
New York Review of Books
二〇〇〇年一月一九日付
[http://www.nybooks.com/
articles/2000/10/19/the-artists-
in-russia-under-stalin](http://www.nybooks.com/articles/2000/10/19/the-artists-in-russia-under-stalin)

〔脚注⑨〕
ホーリー・ケース
「The Chronicle of Higher
Education」二〇一三年一〇
月七日付。
[https://www.chronicle.
com/article/Stalins-Blue-
Pencil/142109](https://www.chronicle.com/article/Stalins-Blue-Pencil/142109)

〔脚注⑩〕
著者不明。
「Book Trade hears appeal
by M.Letish: He urges
a Return to old-Time
Standards of Responsibility
for Works Dealers Sell
Message from President
Books Never Die. He
Writes in Referring to
Anniversary of the Nazi
Bonfire」The New York
Times 一九四二年五月七日
付 p17

ツイオ・シローネの『アブルッツォ三部作』などの海賊版)もおこなわれながら、新たに「解放」された人々向けにも印刷・配布された。^{〔脚注②〕} いかなる演説や教化運動よりも、連合軍兵士たちは出版プログラムによって自分たちが何のために戦っているかを感じ取っていた。

第二次世界大戦後、FBI長官J・エドガー・フーバーの言葉によると「文明を根本から揺るがす力」を妨害するためアメリカ政府は出版界への影響力を強めることに力を注いだ。発行人は彼ら自身も操作されてしまう世論操作人だ。フーバーはその可能性を「Masters of Deceit (詐欺師)」という言葉で言い表している。この言葉は共産主義者からの脅威を述べた自己のベストセラー本の書名でもある。枢軸国(第二次世界大戦で連合国と戦った大日本帝国、ドイツ、イタリアなどの諸国)でも同じだったように、アメリカのプロパガンダ活動員たちは、敵対者たちの頑なさを利用できると考えた。一九五七年、ソビエト連邦の出版社ゴスリテイスダットから出版を断られたボリス・パステルナークは『ドクトル・ジバゴ』の原稿をイタリアの左翼系発行人ジャンジャコモ・フェルトリネッリのエージェントに手渡した。ソ連特使たち(フェルトリネッリの事務所を訪れた特使もいた)の強い反対にも関わらず、フェルトリネッリはこの作品の出版に踏み切った。イタリア版は一日のうちに売切れとなり、CIAの助けも得てヨーロッパ

パ全土でも飛ぶように売れた。『ドクトル・ジバゴ』を読んだアメリカのCIA工作員は「引き続き(イギリスと)この本をどう使うかを綿密に話しあうため、本部にこの本についての計画を常に伝えてくれるよう要請した」。^{〔脚注③〕} イギリスではセツカー&ウォーバークがCIAの資金を使って出版をしていた。一方、フリー・ヨーロッパ・プレスは一〇〇パーセントCIA傘下で政策協調局が運営をしていた。^{〔脚注④〕} 数年後、多くの発行人や出版社はCIAとのつながりを否定する必要はないと感じた。そんな出版社にはビーコン・プレス(編集者で発行人のソル・ステインはCIAの著名メンバーだった。彼は米国文化自由議会(American Committee for Cultural Freedom)に資金提供した)、ファアラ・ストラウス&ジロー(発行人のロジャー・ストラウスは、CIAがお金を出していた彼の文芸スカウトやニュー Yorker 誌のライターの話をしている)があった。^{〔脚注⑤〕}

現在、出版物の存在なしには政治ムーブメントは誕生しない。また、自著(それがゴーストライターの手によってでも)を出版していなければ政治的リーダーの座に就くことはできない。また、最低でも一冊、その文化的基盤を語る本なしにはイデオロギーは持

〔脚注②〕
アレクサンダー・ステイ
ル、イニャツィオ・シロー
ネ『The Abruzzo Trilogy』
(Steerforth Italia: 2000) の
序文 pp.vi-viii

〔脚注③〕
ジョエル・ウイットニー
『Finks: How the C.I.A.
Tricked the World's Best
Writers』 p.62-5
〔脚注④〕
同書 p.38

〔脚注⑤〕
「ストラウスの愛国心に訴え、その男はファアラ・ストラウスにヨーロッパでふたりの男の偽の身分を与えてくれないかと聞いた。彼らはストラウスの文芸スカウトとして実際に働くが、政府組織に報告をし、給与は政府組織が支払う……」ストラウス(スバイ小説の大ファンだった)はこの計画を受け容れた。彼の事務所には彼とのコンタクトのために専用の電話ラインが引かれていた。イアン・パーカー『Showboat: Roger Straus and his flair for selling literature』The New Yorker 二〇〇二年四月八日付

続しない。ファシスト、サパティスタ運動家（サパティスタ運動…メキシコのチアパス州を中心とする革命運動）、それにレーニンからトランプまで、指導者たちへの支援はふたつのものに支えられて始まる。優れた視覚イメージ（ヒラリー・クリントンのパンツスーツ姿、ドナルド・トランプの赤いネクタイと髪型）と本（『村中みんなで』、『トランプ自伝』）。このカテゴリーに入る本としてはウラジミール・レーニンの『なにをなすべきか？』、アドルフ・ヒトラーの『我が闘争』、毛沢東の『毛沢東語録』、アンゲラ・メルケルの『So Wahr mir Gott helfe (So Help Me God: 神に誓って)』、ムアンマル・アル・カッザーフィーの『緑の書』、ジョン・F・ケネディの『勇気ある人々』、バラク・オバマの『マイ・ドリーム』、マーガレット・サッチャーの『Statecraft (国政術)』などだろう。それぞれの本は、持っていると言われる著者の大志を知ってもらうために書かれ、違いはあるがそれぞれに成功している。

自国が外圧により押し潰されそうになる時、エジプト、中国、インドなどで見られるように「自分たちの過去と未来、それに自分たち自身を理解するため」に出版界は勢いづく。インドのチェンナイにあるタラ・ブックスの発行人であり共同主幹であるV・ギータはそう語っている。フランス領北アフリカのアルジェリア生まれの作家たちは、真剣に受け止められるためには、本はまず植民地統治側の言語で出版されなければならない

と知っている。自尊心、反植民地主義、勢いを増す文芸文化は同じ陣営側から生まれ、支配側はその挑戦に常に敏感だった。アルジェリア独立戦争中の一九六二年、アルジェ大学のキャンパスと図書館は、フランスの極右民族主義者の武装地下組織である秘密軍事組織（OAS）の攻撃対象として放火された。この事件はアラビア語圏の国々で記念されている。^⑧ インドでは、一九世紀初頭に邪悪な扇動法が数々制定され、違反した者には国外追放から終身刑までの罪が課された。治安妨害裁判の常で、有罪の証拠として本が使われた（最近のアメリカの事象ではウィリアム・パウエルの『アナーキスト・クックブック』やアビー・ホフマンの『この本を盗め』などを所持しているだけで、暴力的な革命に加担している証拠とされた）。一八〇〇年代の終わりを迎え、ヒンズー自由思想組合は出版社を興し、無神論・合理主義に傾倒する本を出した。一九二〇年代には、『読むのは嫌いだが、聴くのは好き』という人々のための本が出版され、大衆向けのリーディング部屋が多く誕生したとギータは語っている。「口承と著述の世界の接点は近く、そこでは年配女性と若い女性がお互いの絆を培った。人々は初めてきちんとした場所でのインドの書物に触れ、知らない人と繋がる機会を与えられ『新たな世界』に出会うことになった。出版は知識の民主化に大きく貢献した」。これはまた、知識の共有を文化的にタブーとしたカースト制度の伝統を打ち破ったものだった。この瞬間、文化や歴史は社会の中の特権階級とその家族やある種の集団の「財産」ではなく、広く人々が共有す

⑧ <http://www.libraryhistorybuff.com/bibliopliately-algiers-ibrahim>

る記憶となった。発行人たちにとつては難しい決断だったが、英語を拒否し、自己の地域文化の主張を始め、植民地となる以前に人々のあいだで語られ書かれていた多くの言語のなかのひとつで出版を始めた。ヒンディー語、タミル語、マラーラム語、ウルドゥー語、ベンガル語、カンナダ語やそのほかにも数々の言語での出版を始めたのだ。

二一世紀に入ってトルコでは強くナシヨナリズムを主張する政権が台頭したが、文芸発行人は多くの場合、ハラスメントを受けなかった。しかし、例外としてベルゲ・パブリッシング・ハウスの出版人ラジップ・ザラクロウがいる。彼は少なくとも七回起訴された。彼の罪とはなんだったのだろう。彼はギリシヤ人、クルド人、アルメニア人作家の作品の出版をした。トルコ体制側の声以外には容赦がない政権下でマイノリティ文化の維持に力を貸したのだ。中国では、法律の執行に一貫性がないことは編集者たちに広く知られているが、発行人が刑務所に入れられることはとても現実味がある。国家新聞出版広電総局は印刷物と電子業界を完全に掌握している。文化大革命、チベット、旅行ガイドではない国境地域のことを書かれたもの、または天安門広場事件については言及があっただけでも出版が禁じられる。一九九〇年代当時、国家新聞出版総署(GAPP)から出版を禁じられたものにはドクター・スースの『Green Eggs and Ham (緑の卵とハム)』がある。最近、習近平主席の元では検閲がさらに厳しくなり、その結果、政府

と出版の接触もさらに劇的となった。二〇一五年、政府の役人の秘密を暴露する本で知られるマイティ・カレント・メディアに関係する香港の発行人／書籍販売人の五人が行方不明となった。これを書いている時点で、その中のひとりであり、習近平主席の女性関係を書いていたと言われるスウェーデン人発行人の桂民海は今も政府に拘束されたままだ。

出版は文化を記録する手段を提供する。しっかりとした土台を持たない、記録されない文化は脆い。そのことを、ヨルダン川西岸地区やガザ地区に住むパレスチナ人たちは了解している。土地を追われ、貧窮化した五〇〇万人の人々は三〇近い出版社を熱狂的に支持している。紙配布の規制、扇動行為をおこなった理由での作家や編集者の逮捕などにかかわらず出版業界は成長している。本や出版に対する明らかな抑圧を通じての文化攻撃は、戦時や占領地に限ったことではないが、戦争というものはその過程に拍車をかける状況を作り出す。二〇〇三年に起きたバグダッドのイラク国立図書館での略奪についてジャーナリストのロバート・フィスクは「書物誕生の地、図書館発祥の地、最初に法典が作られた地」(脚注⑥)において「破壊された汚れた庭には、アラビア裁判所への推薦状、軍隊への武器補給の要請状、駱駝盗難や巡礼者襲撃の報告書など優美な手書きアラビア語文書が舞っている。私の手には、イラク歴史文書のバグダッド最後の痕跡が

⑥脚注⑥
フェルナンド・バエズ 訳
フレッド・マックアタム

[A Universal History of the
Destruction of Books: From
Ancient Sumner to Modern
Iraq], p.278

あった。しかし、土曜日には考古博物館の古美術品が破壊され、国立公文書館、そしてコーラン図書館も破壊され、イラクの全ての歳月が消し去られた。イラクの文化アイデンティティは消滅しつつある……約一〇〇〇年間、バグダッドはアラブ世界の文化の中心地で、中東で文字の読み書きができる人々が最も多く住む場所だった。一三世紀にチングス・カンの孫がこの街を焼き払い、言い伝えによると、チングリス川は本のインクで黒く染まったという。昨日、古文書の焼かれた灰でイラクの空は埋め尽くされた」。(脚注⑧)

様々な障害があるなか、時代や言語を越えて発行人は自らを、文化遍歴の騎士とみている。少なくとも、ある部分はそうだろうと考えている。例えば、由緒ある出版社であるニュー・ダイレクションの編集ディレクターであるバーバラ・エプラーはその役割を自分の仕事の重要な部分だとみている。「(一九三六年にこの出版社を設立したジェームズ・ラフィンからの) 伝統に応えたいと願っています。彼の目指した出版人になりたい。作家たちの実験を社会に問う、頭の中の壁を動かすようなことをやってみたい。もし、お金が第一の目的だったら、やらないようなことです」。かつてCIAが資金を提供したプロバガンダのバイブ役だったピーコン・プレスは今では人権保護をおこなう優れた出版社だ。出版社のブログで副発行人(Associate Publisher)であるトム・ハロックは「今の時代の需要に応えるためには、ベストセラーを出す必要はない。最高裁判所が同性婚

は合憲との判断を示した日、ヒラリー・グッドリッチ(アメリカ全土で大きな論争を生んだ、マサチューセッツ州でおこなわれた同性婚裁判の原告)はピーコン・プレスがE・J・グラフの『What is Marriage For? (結婚はなんのため?)』を出版してくれたことに礼を述べた。それにより、自身の立場の理論構成ができたと彼女は語っている。この本はそれほど売れなかった。しかし、約一〇〇万人のゲイやレズビアンがアメリカで結婚できる道を作る助けとなった」。(脚注⑨)

多くの発行人にとって、裁判や刑務所、それに合法とされた暴力よりも、資金の流出や市場の圧力の方が緊急な問題だろう。出版は利益の出ない月日が続くと続いてしまう業界だ。発行人は常に需要と供給の法則を無視する。読者が本に対し、安定した価値を見出せなくなるほど多くの本が出ている。フィクション・コレクティブ(現在の名称はフィクション・コレクティブ2)やA・K・プレスのように作家自身が自分たちの手によって出版を試みる動きや、ウルフ夫婦や彼らのホガス・プレスのように反商業的な協同組合的な伝統も残っている。出版社への商業的圧力はさらに高まっている。オンラインやオンラインの外で作家個人が出版社となる、先祖返りのような最近の動きは、ワットパッドやスマッシュワード、ライトニング・ソースのような企業によって助けられている。彼らの全てが、それぞれ違ったやり方で文化の宮殿の扉をこじ開ける正当な主張

(脚注⑧)
ロバート・フェイス「図書館の本、手紙、価値のつけられない文書はバグダッド略奪の最終章として火がつけられた」The Independent 二〇〇三年四月十五日付

(脚注⑨)
トム・ハロック
「The work of publishers in an authoritarian age」Beacon Broadside 二〇一七年一月十九日付
http://www.beaconbroadside.com/broadside/2017/01/the-work-of-publishers-in-an-authoritarian-age.html

をし得る立場にいる。例えば、ワットパッドは編集からの「干渉」なしに書き手がそのサイトで直接出版ができる。ここから何冊もの商業的に成功した本や、少なくとも一本の映画が生まれた。

戦争、権力からの弾圧、またそれと同じくらい抑圧的な利益創出の要求が文化への攻撃として力を結集するなら、死ぬことのない挑戦的な発行人は手強い敵となるだろう。技術の進化に伴い、出版行為はこれから先の世代にとつてさらに手軽なものとなっていくだろう。歴史は繰り返されている。近代前の時代のように作家が自らの出版をおこなう時代が再び訪れた。結果は津波のような大量の出版物という喜ばしい混乱だ。発行人、出版社、作家、読者の垣根は消え、文化の道具が限られた数人の手の中にあるだけの時代は終わりを告げようとしているのだ。

謝辞

セント・プリモ・レヴィイのディレクターであるアレックスサンドロ・カッシン氏、タラ・ブックスの共同ディレクターで発行人のV・ギータ氏、作家で批評家のデール・ベック氏、ニュー・ダイレクションズの編集ディレクターのバーバラ・エプラー氏、ニューヨーク公共図書館上級レファレンス図書委員マシュー・J・ポイラン氏、ニュー・スクール大学ヴェラ・リスト・センター・フォー・アート・アンド・ポリテイクスのディレクター、カリン・クオニ氏、また今回の著作に対して数々のアイデアを練り直し、補強してくれた全ての人々に深く感謝いたします。

- Béaz, F. (2008). *A Universal History of the Destruction of Books: From Ancient Sumner to Modern Inq.* Translated by A. MacAdam. New York: Atlas and Co.
- Getzman, J. (2002). *Bookleggers and Smuthounds: The Trade in Erotica, 1920–1940*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Giroud, Vincent. (2013). 'The History of the Book in France', in *The Book: A Global History*. Edited by Michael F. Suarez and H. R. Woodhuysen, Oxford: Oxford University Press, pp. 328–48.
- Hoover, J. (1958). *Masters of Deceit: The Story of Communism in America and How to Fight It*. New York: Henry Holt and Company.
- Jardine, L. (1998). *Worldly Goods: A New History of the Renaissance*. New York: W.W. Norton.
- Knuth, R. (2003). *Libricide: The Regime-Sponsored Destruction of Books and Libraries in the Twentieth Century*. Westport, CT: Praeger.
- Ladenson, Elisabeth. (2013). 'Censorship', in *The Book: A Global History* Edited by Michael F. Suarez and H. R. Woodhuysen, Oxford: Oxford University Press, pp. 1639–82.
- Manguel, A. (2008). *The Library at Night*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Rosser, B. (2016). *Rosser: My Life in Publishing*. New York: OR Books.
- Silone, Ignazio. (2000). *The Abruzzo Trilogy*. Hanover, NH: Steerforth Italia.
- Southern, N. (2004). *The Candy Men: The Rolling Life and Times of the Notorious Novel Candy*. New York: Arcade Publishing.
- Stark, Gary D. (1981). *Entrepreneurs of Ideology: Neoconservative Publishers in Germany, 1890–1933*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Suarez, M. and H. Woudhuysen, eds (2014). *The Book: A Global History*. Oxford: Oxford University Press.
- Whiney, Joel. (2016). *Finks: How the C.I.A. Tricked the World's Best Writers*. New York: OR Books.
- Williams, A. (2017). *The Social Life of Books: Reading Together in the Eighteenth-Century Home*. New Haven, CT: Yale University Press.

アイデアの錬金術：出版と文化

原題 The Alchemy of Ideas: Publishing and Culture

著者 ジョン・オークス John Oakes

訳者 秦 隆司 Takashi Hata

発行日 2019年1月31日 第1版

2019年12月9日 第2版

発行者 鎌田純子

発行所 株式会社ボイジャー

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-41-14

電話 03-5467-7070

<https://www.voyager.co.jp/>

印刷／製本 株式会社丸井工文社

表紙 Cover designer 平野甲賀 Koga Hirano

本文デザイン Typesetter 吉川 進 Susumu Yoshikawa

編集 Editor 鎌田純子 Junko Kamata

© John Oakes, Takashi Hata, 2019

Published by Voyager Japan, Inc., Tokyo

Authorized Japanese translation of English edition of the essay: The Alchemy of Ideas: Publishing and Culture. This essay appears as a chapter in the forthcoming Oxford Handbook of Publishing Studies.

This translation is published by John Oakes' permission.

本書の一部あるいは全部を利用(複製、転載等)するには、著作権法上の例外を除き、著作権者の許諾が必要です。

Printed in Japan